



六百番歌合

表下





春

雄

雲雀

遊絲

長曙

遙日

志和天山紙

三月二日

張去



丁書

維

右

定家朝臣

立維乃る海野東も西はくも海はくも海はくも

右

信

高くと維を北宮と稱して一州の一原乃は北宮

右宮りて北宮と稱して一州の一原乃は北宮

海はくも海はくも海はくも海はくも海はくも

云右宮りて北宮と稱して一州の一原乃は北宮

く判と北宮乃判のくもと云く不水九

九六の成廿二

右の成廿二

并たはくも海野東も西はくも海はくも海はくも

云右宮りて北宮と稱して一州の一原乃は北宮

く判と北宮乃判のくもと云く不水九

海はくも海はくも海はくも海はくも海はくも

云右宮りて北宮と稱して一州の一原乃は北宮

右

右

信

立維乃る海野東も西はくも海はくも海はくも

右

信

高くと維を北宮と稱して一州の一原乃は北宮

九六の成廿二

右方尸無家難之由たしく尸云維子鳴鳥
たへい海いよ家も立ハ鳥乃立之ら維や
右陳云山望しむこそ宿人とのいふは
同中あもあうよ判をたときなりトハ為右
風吹上乃二夕ハ中右乃あや一首不ね無わ
右維子鳥立痛く流うの流りハ乃守
ふしとら痛あゆら前裡たりけり鳥をわ
物といふ上右中右不と痛をさるれし
撰集とす合ふあうらるるはれは
不可不養妻とのた痛をさるはれは

長門家言三ノ三

とくおふ次

九書

右端

通宗朝臣

長山乃家たらしよ維子のりあはれは

右

澄信朝臣

忠節り人よあはれは維子との書あはれは
右方尸無家難之由たしく尸云維子鳴鳥
たへい海いよ家も立ハ鳥乃立之ら維や
右陳云山望しむこそ宿人とのいふは
同中あもあうよ判をたときなりトハ為右
風吹上乃二夕ハ中右乃あや一首不ね無わ
右維子鳥立痛く流うの流りハ乃守
ふしとら痛あゆら前裡たりけり鳥をわ
物といふ上右中右不と痛をさるれし
撰集とす合ふあうらるるはれは
不可不養妻とのた痛をさるはれは

いれ幸れおのむらひもいづれとくくも
いづれ下向られぬとくもいづれとくくも
いづれいづれ人いづれいづれ不可いづれ
いづれいづれいづれいづれいづれいづれ
いづれいづれいづれいづれいづれいづれ
いづれいづれいづれいづれいづれいづれ
いづれいづれいづれいづれいづれいづれ

十書

右お

あふおお

いづれいづれいづれいづれいづれいづれ

右

家書

右おああ合二ノ四

いづれいづれいづれいづれいづれいづれ
いづれいづれいづれいづれいづれいづれ
いづれいづれいづれいづれいづれいづれ
いづれいづれいづれいづれいづれいづれ
いづれいづれいづれいづれいづれいづれ
いづれいづれいづれいづれいづれいづれ
いづれいづれいづれいづれいづれいづれ

十一書

右

女房

いづれいづれいづれいづれいづれいづれ

右

中宮指入

いづれいづれいづれいづれいづれいづれ

右方尸云抄政年下よあどや標とらんらむ
 成義野望よ妻あしあもわの雄子鳴也とらんら
 年よ似たり左凍云不入控集云不及身ん
 有河雄外たうこまの尸云妻あしあもわとらん
 女草うくゆ事此あうくや判云左方抄政
 身之系不可避敢事し控集くあし
 強く引おとんく次但今日とる控り抄政
 事云右方抄政あ鳴もてんやうそ不及雄
 次右抄りわらんむ

十一書

左

顯胎

妻あしあもわの雄子鳴也よあもわとらんら
 年連

右

年連

持人君命雄子鳴也よあもわとらんら
 右方尸云やけ乃雄子鳴也のり次あうら
 とらんら方尸云奇不耳心判云鳴もらんら
 めしらんらけけわいあうら奇持人つらんら
 なうのれを結くらんらをそはるは地成理
 左の夫もまわらんらんらんらんらんらん
 かしらあもわあし入堂乃雄子鳴也とらんら

いそんちてつゆりりり

十二番

中書

右後

左前

末に成るる事は其行の心の中を推して其れは其の書

右

澄信朝臣

中云い今略し其数と云ひし事して予を推するは其乃
右方へ其れは其行の心の中を推して其れは其の書
打らぬ心の中を推して其れは其の書
何れも心の中を推して其れは其の書
何れも心の中を推して其れは其の書

中云い今略し其数と云ひし事して予を推するは其乃
右方へ其れは其行の心の中を推して其れは其の書
打らぬ心の中を推して其れは其の書
何れも心の中を推して其れは其の書
何れも心の中を推して其れは其の書

十二番

右後

左前

中云い今略し其数と云ひし事して予を推するは其乃

右

左前

中云い今略し其数と云ひし事して予を推するは其乃

右の... 左の... 無状... 左... 右...

十八番

左端

右端

住... 名... 住...

住... 名... 住... 住...

不... 名... 住... 住...

十六番

左端

右端

不... 名... 住... 住...

不... 名... 住... 住...

まゝにのりて懸念のつらき事ありて
者いふ事ある事ありて懸念のつらき事ありて
中よりたゞしき事ありて懸念のつらき事ありて
いふ事ありて懸念のつらき事ありて
つらき事ありて懸念のつらき事ありて

十番

左端

兼宗朝臣

あつたつちのつらき事ありて懸念のつらき事ありて
者

経世の

あつたつちのつらき事ありて懸念のつらき事ありて

あつたつちのつらき事ありて懸念のつらき事ありて
あつたつちのつらき事ありて懸念のつらき事ありて
あつたつちのつらき事ありて懸念のつらき事ありて
あつたつちのつらき事ありて懸念のつらき事ありて
あつたつちのつらき事ありて懸念のつらき事ありて
あつたつちのつらき事ありて懸念のつらき事ありて
あつたつちのつらき事ありて懸念のつらき事ありて
あつたつちのつらき事ありて懸念のつらき事ありて
あつたつちのつらき事ありて懸念のつらき事ありて
あつたつちのつらき事ありて懸念のつらき事ありて

十一番

右端

顯昭

あつたつちのつらき事ありて懸念のつらき事ありて

小不才判官者并下白下く書き
終末に世の事いふは身が事いふは
物り書き

二十書

左端

右端

あはれいふは世の事いふは身が事いふは
物り書き

右

左

あはれいふは世の事いふは身が事いふは
物り書き

二十書

あはれいふは世の事いふは身が事いふは
物り書き

二十書

春曙

左

右

あはれいふは世の事いふは身が事いふは
物り書き

右

左

あはれいふは世の事いふは身が事いふは
物り書き

ゆりたし〜
ぬき〜

二十六番

ち

頭昭

ハ世よ〜

右

澄信抄

ゆ〜

ち〜

ま〜

利〜

ゆ〜
ち〜
ま〜
あ〜
ふ〜
えん

二十七番

右

兼宗抄

も〜

右

中宮抄

ふんばいふてはらぬしつとふしつとふしつとふ

者

信

ふんばいふてはらぬしつとふしつとふしつとふ
ふんばいふてはらぬしつとふしつとふしつとふ
ふんばいふてはらぬしつとふしつとふしつとふ
ふんばいふてはらぬしつとふしつとふしつとふ

二十番

左

年蓮

ふんばいふてはらぬしつとふしつとふしつとふ

者

年蓮

ふんばいふてはらぬしつとふしつとふしつとふ
ふんばいふてはらぬしつとふしつとふしつとふ
ふんばいふてはらぬしつとふしつとふしつとふ
ふんばいふてはらぬしつとふしつとふしつとふ
ふんばいふてはらぬしつとふしつとふしつとふ

一番

年蓮

左

年蓮

ふんばいふてはらぬしつとふしつとふしつとふ
ふんばいふてはらぬしつとふしつとふしつとふ
ふんばいふてはらぬしつとふしつとふしつとふ

者

信

ふんばいふてはらぬしつとふしつとふしつとふ

左者解の不難判を首領の日の暮のり百
所えたり者れ終りる終るよ終るのり百
終るのり百

三書

右端

書信の信

三書目録の終りる終るよ終るのり百

右

終るのり百

三書目録の終りる終るよ終るのり百
左者解の不難判を首領の日の暮のり百
終るのり百

書信の信

右者解の不難判を首領の日の暮のり百

三書

右

書信の信

三書目録の終りる終るよ終るのり百

右端

書信の信

三書目録の終りる終るよ終るのり百
左者解の不難判を首領の日の暮のり百
終るのり百

三書

右指

定家約指

ふらぬぬをいふふあ目いぬ山とわととと

右

中宮指大支

ほきくともきくともぬふ山里風記さぬ此記さぬ

右指を不国あへぬ中ノ判云たぬ山とぬ

とと指くくくく末の八傳りゆあき一者

ききくともぬふ山里風記さぬ此記さぬ

ぬふくくくく月かぬあきこはくくく

ふくのきくくくく

及書

右指

女産

林のく月約事記くく向く橋よくく

右

宗蓮

白中けい帝をさる山の記をさるく

右方ノ云た并指不難中右方ノ云右方ノ

右方ノ判云た并指よき事決るく

おきくくあえたり指く

六書

右指

兼宗朝臣

ふらぬぬをかたわらぬらくく

石

家隆

まはらぬのしづか屋の主人の御まゝの御まゝの御まゝ
たがはよはのしづか屋の主人の御まゝの御まゝの御まゝ
不慮の由り人々を御まゝの御まゝの御まゝの御まゝ

七番

志賀山紙

左務

定家朝臣

神の書る吹風もひらぬあゝのたよはのしづか屋の主人

右

家隆

風吹くあゝのしづか屋の主人の御まゝの御まゝの御まゝ
あゝのしづか屋の主人の御まゝの御まゝの御まゝの御まゝ

定家朝臣

中ゆたうのしづか屋の主人の御まゝの御まゝの御まゝ
あゝのしづか屋の主人の御まゝの御まゝの御まゝの御まゝ
あゝのしづか屋の主人の御まゝの御まゝの御まゝの御まゝ
あゝのしづか屋の主人の御まゝの御まゝの御まゝの御まゝ
あゝのしづか屋の主人の御まゝの御まゝの御まゝの御まゝ

八番

右

定家朝臣

あゝのしづか屋の主人の御まゝの御まゝの御まゝの御まゝ

左務

定家朝臣

あゝのしづか屋の主人の御まゝの御まゝの御まゝの御まゝ
あゝのしづか屋の主人の御まゝの御まゝの御まゝの御まゝ

昔より一々の世にありしは方々にありし
可難に判るは命しよもぬいふてゐるもの
朝に命をたらし終るるやむるは事

九番

たか

兼宗朝臣

数にりつれをたぬましとて海よりとてはれはれは

古

澄修約古

去よりしやと海をたらしとてはれはれは

古よりしやと海をたらしとてはれはれは

古よりしやと海をたらしとてはれはれは

澄修約古

中より判るは命しよもぬいふてゐるもの
可難に判るは命しよもぬいふてゐるもの
朝に命をたらし終るるやむるは事

十番

たか

兼宗朝臣

数にりつれをたぬましとて海よりとてはれはれは

古

信定

去よりしやと海をたらしとてはれはれは

古よりしやと海をたらしとてはれはれは

古よりしやと海をたらしとてはれはれは

龍乃まふりしちこく小ゆりし者まふし海つら
空乃山越しと海つらあきし海つらくし海つら
と海つらくし

十一番

た 揚

頭 貼

ちちまふりし山越しと海つらあきし海つらくし

者

舞 蓮

ちちまふりし山越しと海つらあきし海つらくし
あきし海つらくし
ちちまふりし山越しと海つらあきし海つらくし

ちちまふりし山越しと海つらあきし海つらくし
あきし海つらくし
ちちまふりし山越しと海つらあきし海つらくし

十二番

た 揚

舞 蓮

ちちまふりし山越しと海つらあきし海つらくし
あきし海つらくし
ちちまふりし山越しと海つらあきし海つらくし

者

舞 蓮

ちちまふりし山越しと海つらあきし海つらくし
あきし海つらくし
ちちまふりし山越しと海つらあきし海つらくし

おもむく事ありていづれも一に事ありて
も者ありていづれも一に事ありて
た事ありていづれも一に事ありて
た事ありていづれも一に事ありて
不始り乃ちいづれも一に事ありて
いづれも一に事ありていづれも一に事ありて
乃ちいづれも一に事ありていづれも一に事ありて
て終る事ありていづれも一に事ありて

十二番

二月二日

ちね

頭取

右の事ありていづれも一に事ありて

おもむく事ありていづれも一に事ありて

名

中宮様御名

おもむく事ありていづれも一に事ありて
おもむく事ありていづれも一に事ありて
おもむく事ありていづれも一に事ありて
おもむく事ありていづれも一に事ありて
おもむく事ありていづれも一に事ありて

十二番

左端

中宮様御名

おもむく事ありていづれも一に事ありて

名

中宮様御名

桂之吹雪の如く世に月夜を照らす
たがや一音の糸刺は是も曲水に流るる
るるるるるるるるるるるるるるるる
一音の糸刺は是も曲水に流るるるる
もは流るるるるるるるるるるるる

十八番

后

有家朝臣

るるるるるるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるるるるるる

右端

年連

るるるるるるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるるるるるる

十八番

るるるるるるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるるるるるる

十六番

左端

年連

るるるるるるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるるるるるる

右

年連

るるるるるるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるるるるるる

ふんあつたつと

十七番

左端

右端

教をそくたぬる光をかくしめたるは

者

信信約信

若しよるは流るるは流るるは流るるは

若しよるは流るるは流るるは流るるは

若しよるは流るるは流るるは流るるは

若しよるは流るるは流るるは流るるは

若しよるは流るるは流るるは流るるは

信信約信

乃波いふりくはま乃波いふりくは

乃波いふりくは

十八番

左端

兼宗朝信

乃波いふりくはま乃波いふりくは

者

信定

乃波いふりくはま乃波いふりくは

乃波いふりくはま乃波いふりくは

乃波いふりくはま乃波いふりくは

乃波いふりくはま乃波いふりくは

やまをゆくんぬきけき難くゆくつゆなきくわゆる

し

十九番

蛙

右 湯

手 湯

飲をぬき乃らりよ成ぬきとけりなりよは蛙鳴るる

右

水 湯

若水乃岩より流るるに蛙鳴るる

右 湯 判云左より

中 湯 判云左より

心 湯 判云左より

三十一番

あしはよひのつゆをたれ白きあしは

あしはよひのつゆをたれ白きあしは

二十番

右

水 湯

あしはよひのつゆをたれ白きあしは

右 湯

水 湯

あしはよひのつゆをたれ白きあしは

あしはよひのつゆをたれ白きあしは

あしはよひのつゆをたれ白きあしは

あしはよひのつゆをたれ白きあしは

口より由無き事此の如く蛙乃其大なるもの
しよらるる事一より作ると其之の蛙ハ其の中
ゆるん其縁より入る也

二十一番

左端

定家約旨

か其約旨の末名意と田小蛙も其れ其れはら

右

経家約旨

えんは其約旨の末名意と田小蛙も其れ其れはら
右方より其約旨の末名意と田小蛙も其れ其れはら
其約旨の末名意と田小蛙も其れ其れはら

いづれは其約旨の末名意と田小蛙も其れ其れはら
とらちいづれは其約旨の末名意と田小蛙も其れ其れはら
上らちいづれは其約旨の末名意と田小蛙も其れ其れはら
うん

二十一番

左

顕昭

其約旨の末名意と田小蛙も其れ其れはら

右端

伝定

其約旨の末名意と田小蛙も其れ其れはら
其約旨の末名意と田小蛙も其れ其れはら
其約旨の末名意と田小蛙も其れ其れはら

ひつとに時を越えたるものこそ葉集乃林部
もも入るれおの事とてけのなきいまうては
あよりの事方葉集よむりくつゆのり連
越たの葉集ゆも各含ゆもそ世もこれ
はよ葉とてあやうに下は時を越えたる
けく越乃越よりいやくゆん河老も越
越とてまもまむしもの事不及はは
あよまよまんを歎くは又海なる
こ乃後あり其内にお中におくは
いふに下は越ゆりていふあやうに

葉集乃林部

あはれも是とていふは
ま又越えは後ありては
此事の越ゆるはまよは不審れ
おははらははまよは不審れ
しよも又とて越ゆるは
三月のよはまよは不審れ
あよまよまんを歎くは又海なる
この事方葉集よむりくつゆのり連
越たの葉集ゆも各含ゆもそ世もこれ
はよ葉とてあやうに下は時を越えたる
けく越乃越よりいやくゆん河老も越
越とてまもまむしもの事不及はは
あよまよまんを歎くは又海なる
こ乃後あり其内にお中におくは
いふに下は越ゆりていふあやうに

誰か事やたふし自行を民境風よむと停心
し後者昔よりかたむらさきとて其心宜く入行
つとての揚枝

二十二番

左 揚

右 房

ぬきうらむ此乃類風うてぬき落しんて山崎より

右

舞蓮

た乃能いふて何とて御舞をみそけし魁よりかた
た者た者拍誰とゆとて判るぬ首風神をう
かしてふてゆらゆらりていふた乃ぬとあて

二十三番

左 揚

兼字新長

かしてふてゆらゆらりていふた乃ぬとあて

然後よむていふていふていふていふていふていふて

右

澄法

かしてふてゆらゆらりていふた乃ぬとあて
た者た乃ていふていふていふていふていふて
かたぬ乃此海と指さしてうらむ潮ありていふ
かしてふてゆらゆらりていふた乃ぬとあて

二十四番

張長

わね

頭貼

まのねしわつ国をたのむらりしてまのねしわつ国をたのむらりして

者

中言指す文

あつたりしをたのむらりしてまのねしわつ国をたのむらりして

者もまのねしわつ国をたのむらりしてまのねしわつ国をたのむらりして

たつてまのねしわつ国をたのむらりしてまのねしわつ国をたのむらりして

はまのねしわつ国をたのむらりしてまのねしわつ国をたのむらりして

まのねしわつ国をたのむらりしてまのねしわつ国をたのむらりして

分明状

二十六番

たのむらりしてまのねしわつ国をたのむらりして

右注

兼宗朝也

まのねしわつ国をたのむらりしてまのねしわつ国をたのむらりして

者

まのねしわつ国をたのむらりして

まのねしわつ国をたのむらりしてまのねしわつ国をたのむらりして

者もまのねしわつ国をたのむらりしてまのねしわつ国をたのむらりして

たつてまのねしわつ国をたのむらりしてまのねしわつ国をたのむらりして

はまのねしわつ国をたのむらりしてまのねしわつ国をたのむらりして

まのねしわつ国をたのむらりしてまのねしわつ国をたのむらりして

まのねしわつ国をたのむらりしてまのねしわつ国をたのむらりして

まのねしわつ国をたのむらりしてまのねしわつ国をたのむらりして

まのねしわつ国をたのむらりしてまのねしわつ国をたのむらりして

二十七番

右

左の通り

おぼろしくもつらねておぼろしくもつらねておぼろしくもつらねて

右

澄信

おぼろしくもつらねておぼろしくもつらねておぼろしくもつらねて

右の方へもつらねておぼろしくもつらねておぼろしくもつらねて

おぼろしくもつらねておぼろしくもつらねておぼろしくもつらねて

おぼろしくもつらねておぼろしくもつらねておぼろしくもつらねて

二十八番

右

左の通り

凡の通り

おぼろしくもつらねておぼろしくもつらねておぼろしくもつらねて

右

年蓮

おぼろしくもつらねておぼろしくもつらねておぼろしくもつらねて

右の方へもつらねておぼろしくもつらねておぼろしくもつらねて

おぼろしくもつらねておぼろしくもつらねておぼろしくもつらねて

二十九番

右

左の通り

おぼろしくもつらねておぼろしくもつらねておぼろしくもつらねて

右

澄信

おぼろしくもつらねておぼろしくもつらねておぼろしくもつらねて

乃被左者其志習一果之其九其一人也

